

生体腎移植の増加
ABO 血液型不適合移植

植数は増加し、1989年には261例となり、日本の移植史上、年間の献腎移植症例数の最多となった。これは改正臓器移植法が施行された当時(2009年)の献腎移植数の2倍近い^{参考 URL 1)}。その後1990年代に「臓器の移植に関する法律」の成立に向けての議論が始まると、生体腎移植のみならず、献腎移植も減少した。しかし、法律は成立したものの、亡くなった人からの臓器提供は増加せず、逆に生体腎移植は増加の一途をたどった。これは、成績の向上とともに、従来不可能であったABO血液型不適合移植が可能になり、夫婦間での生体腎移植が増加した結果である。

2 腎移植の最近の傾向

夫婦間移植

先行的腎移植(PEKT)

低侵襲術式

脾腎/肝腎同時移植

最近の腎移植の傾向を示すため、2016年の腎移植登録のなかで詳細な登録がなされたものについて解析すると¹⁾、2016年の生体腎移植のうち、ABO血液型不適合は33%であった。夫婦間で行われたものは43%であり、親子間の41%を超えている。また、維持透析を受けずに腎移植に至るPEKT(pre-emptive kidney transplantation, 先行的腎移植)症例が34%と報告されている。生体ドナーの腎採取術の術式は、鏡視下で行われた症例は96%となり、低侵襲術式が一般的になった。

2016年の献腎移植177例のうち、腎単独で移植されたのは141例で、脾腎同時移植が33例、肝腎同時移植が3例あり、脾あるいは肝との同時移植が優先されている結果である。生体腎移植では他臓器との同時移植症例はない。

II 腎移植成績の推移

- point
- ▶ タクロリムスの開発により腎移植成績は向上した。
 - ▶ 最近の腎移植成績は10年生着率で生体腎移植90%以上、献腎移植80%以上と考えられている。

腎移植では、移植した腎臓の機能が廃絶しても、透析治療が導入されれば命に関わることはない。このため腎移植成績は、移植を受けた患者の生存率

【用語解説】

● 献腎移植

かつて、亡くなった人から提供された腎臓の移植は、「死体腎移植」と呼ばれていた。しかし、「死体」という言葉に違和感があるため、「献腎移

植」と呼ばれるようになった。献腎移植には、脳死下に提供された腎と心停止下に提供された腎での移植がある。